

『詩経』 旄丘篇解釈から見た『毛傳』の訓詁態度

藪 敏裕

（一九九三年六月十八日）

一 問題の所在

近年詩経^①研究においては、『詩』の本文そのものの研究が中心であり、『毛傳^②』は単にその一注として、『詩経』を読むための二次的・傍系的なものとしての取扱いしか受けてこなかった。そのため、『毛傳』がいかなる必然性により、いかなる人々によって、なんのために作られたのかという問題にいたっては、一部の例外を除けばほとんど研究の対象とはされてこなかった。

『毛傳』の訓詁態度について、筆者はすでに拙論「『王事靡盬』解釈から見た『毛傳』の訓詁態度^③」において、「王事靡盬」という句に注目して検討した。そして、「王事靡盬」について漢代通行の解釈は「王事盥むこと靡し」と読み、「戦役が終息しない」という事実を直叙する意であったにもかかわらず、『毛傳』は宣帝期の政治的背景、具体的には塞外民族にそなえて辺境駐屯の守備兵の維持に膨大な出費を強いられたという政治的背景のため、「王事盥むこと靡し」と読み、「王命による戦役はないがしろにすることはできない」と政治的に解釈したのではないかと推定し

た。したがって、従来言われてきた『毛傳』が所謂訓詁学的な立場に立っているとする説は当然成立せず、『毛傳』はある種の主張しかも政治的立場のそれに立って作成されていると論じた。本稿では、この『毛傳』が『詩経』解釈についていかなる価値観にたっているかを、さらに邶風旄丘篇の検討をもとに考察してみる。

二 旄丘篇の原義

旄丘篇は、

- 第一章 旄丘之葛兮、何誕之節兮、叔兮伯兮、何多日也、
- 第二章 何其處也、必有與也、何其久也、必有以也、
- 第三章 狐裘蒙戎、匪車不東、叔兮伯兮、靡所與同、
- 第四章 瑣兮尾兮、流離之子、叔兮伯兮、裒如充耳、

と、四章十六句からなる詩である。『毛傳』はこの詩の冒頭の二

句「旄丘之葛兮、何誕之節兮、」を、「興也^⑤」としている。葛を呪物とする草の興詞である。近年の『詩経』本文の類型化およびその比較による原義研究によれば、興詞に詠まれる動物・植物・天地山川・ある行為等の対象は本来呪物であり、この呪物の呪力性が『詩経』の意味を規定するとされている。したがって、旄丘篇の原義的詩意も草（この場合は葛）の有する呪力性にその内容・意味を規定されなければならぬこととなる。

それでは、『詩経』中で草を呪物として有する興詞はどのような意義を持つものであろうか。この点について、赤塚忠は「古代における歌舞の詩の系譜^⑥」において、

例えば、『詩経』の中に見る最も顕著な興物は、草・木・鳥・風・雨・車馬等であるが、草は思慕または歓待に興せられて恋愛または饗宴の場合に使用され、…

と述べ、草の興詞が「思慕または歓待」を表す場合に用いられることを述べている。

また、白川静は「詩経国風について^⑧」において、

詩篇には、草木の茂るさま、水流のさかんなるさま、青山、高山のそびえるさま、またそれらを「瞻^⑨る」というような表現が、發想として用いられることが多い。このような自然の姿を點出することは、たんなる氣分象徴というようなことではなく、魂振りのに、それを歌うことによつて、その自然のさかんなる生命力を移入し、受容することができるとする古代的な觀念を、背景としている。それは一種の呪的自觀である。

と、草を含む一般的な興詞の性格を古代の宗教意識との関係から

説明し、さらに旄丘篇の解説部分で、

草木が生い茂るといふ發想は祝頌の氣分をもち、鳥の鳴き声は祭事詩の發想に多く用いるもので、それらは歸寧の禮の背景を構成する。^⑩

と述べて、草の興詞は本来「祝頌」の意味を表していることを述べている。

また境武男は、周南樛木篇の付説「君子祝頌と草木の興^⑪」の部分において、

君子に対する祝頌の詞を、まず「南有樛木」と歌い起して疊詠する。

と、やはり草の興詞が「祝頌」の意味を表すことを述べる。

さらに、目加田誠は采葛篇の解説部分で、

恐らく草摘み歌の形であらう。多くの場合人を偲ぶ心持ちを詠ひ起すものである。

と、やはり草の興詞が「思慕」の意味を表すことを述べる。以上概観するところ、草は「思慕・歓待・祝頌」を表す呪物として『詩経』で用いられている。

さてそれでは、旄丘篇に見える興詞「旄丘之葛兮、何誕之節兮」の中の呪物「葛」は、『詩経』中にあって他の草の興詞の呪物と同様に上述したような意味を担っているであろうか。「葛」は、『詩経』中には周南葛覃篇、同樛木篇、邶風旄丘篇、王風葛藟篇同采葛篇、唐風葛生篇、大雅文王之什旱麓篇、七篇にわたり十三見する^⑫。

この中でまず、周南葛覃篇は、

○葛之覃兮、
施于中谷、
維葉萋萋、
黃鳥于飛、
集于灌木、
其鳴喈喈、
○葛之覃兮、
施于中谷、
維葉莫莫、
是刈是漙、
為絺為綌、
服之無斁、
○言告師氏、
言告言歸、
薄汗我私、
薄滌我衣、
害滌害否、
歸寧父母、
○葛之覃兮、
中谷の施び、
維の葉萋萋たり、
是に刈り是に漙る、
絺と為し綌と為し、
之を服して斁うこと無し、
言に師氏に告げ、
言に告げ言に歸がん、
薄に我が私を汗がん、
薄に我が衣を滌わん、
害をか滌い害をか否せざらん、
歸きて父母を寧ぜん、

と三章十八句からなる詩である。第一章の「葛之覃兮、施于中谷、維葉萋萋第二章の「葛之覃兮、施于中谷、維葉莫莫、」に「葛」が見える。葛覃篇は第三章に「言告言歸、：歸寧父母、」と、一族の処女が嫁ぐことによりその父母を安心させ、ひいては出自の祖霊を安んぜしめるといふ句があることからすると、この「葛」は嫁ぎ先の婿たる若者に対する思慕、また婚姻を許可してくれた祖霊に対する「歡待・祝頌」を表す呪物であると考えられる。

つぎに、王風葛藟篇は、

○縣縣葛藟、
在河之漘、
終遠兄弟、
謂他人父、
謂他人父、
亦莫我顧、
○縣縣葛藟、
在河之涘、
終遠兄弟、
謂他人母、
謂他人母、
亦莫我有、
○縣縣葛藟、
在河之漘、
終遠兄弟、
謂他人昆、
謂他人昆、
亦莫我聞、
縣縣たる葛藟は、
河の漘に在り、
終に兄弟に遠ざかり、
他人を父と謂う、
他人を父と謂うも、
亦た我を顧みる莫し、
縣縣たる葛藟は、
河の涘に在り、
終に兄弟に遠ざかり、
他人を母と謂う、
他人を母と謂うも、
亦た我に有しむ莫し、
縣縣たる葛藟は、
河の漘に在り、
終に兄弟に遠ざかり、
他人を昆と謂う、
他人を昆と謂うも、
亦た我を聞く莫し、

と、疊詠形式からなる三章十八句の詩である。この詩意について白川静は、「見知らぬ他人の中でくらす孤獨さを歌う。」とし、境武男もほぼ同様に、この詩は「生家をはなれて遠く嫁いだ女が、婚家の者から冷たくされる悲しみ」を歌ったと考えている。葛藟篇は各章の後半四句が嫁いだ女の嘆きを述べており、白川説・境説よりすば、「縣縣葛藟、在河之漘、」^①「縣縣葛藟、在河之涘、」^②「縣縣葛藟、在河之漘、」^③は嫁ぎ先の婿たる若者或いは父母兄弟に対する思慕を表す興詞であり、「葛」は肉親に対する「思慕」の情を表していると考えることができよう。

つぎに、王風采葛篇は、

○彼采葛兮、
一日不見、
三月のごとし、

○彼采蕭兮、
一日不見、
彼の蕭を采る、

○彼采艾兮、
一日不見、
彼の艾を采る、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
三秋のごとし、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
一日見ざれば、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
一日見ざれば、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
一日見ざれば、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
一日見ざれば、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
一日見ざれば、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
一日見ざれば、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
一日見ざれば、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
一日見ざれば、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
一日見ざれば、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
一日見ざれば、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
一日見ざれば、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
一日見ざれば、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
一日見ざれば、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
一日見ざれば、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
一日見ざれば、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
一日見ざれば、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
一日見ざれば、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
一日見ざれば、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
一日見ざれば、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
一日見ざれば、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
一日見ざれば、

○彼采芣苢兮、
一日不見、
一日見ざれば、

敏 裕 藪

と、豊詠形式からなる三章九句からなる詩で、採る草と期日が三度言い換えられているが、「彼采葛兮」、「彼采蕭兮」、「彼采艾兮」、「彼采芣苢兮」が思う人を思慕する興詞として使われており、「葛」も思慕を表していることは説明するまでもなく明白であろう。最後に、唐風葛生篇は、

○葛生蒙楚、
藪蔓于野、

予美亡此、
誰與獨處、

○葛生蒙棘、
藪蔓于域、

予美亡此、
誰與獨息、

○角枕粲兮、
錦衾爛兮、

○角枕粲兮、
錦衾爛兮、

○角枕粲兮、
錦衾爛兮、

○角枕粲兮、
錦衾爛兮、

○角枕粲兮、
錦衾爛兮、

○角枕粲兮、
錦衾爛兮、

葛生えて楚を蒙い、
藪は野に蔓ぶ、

予が美きひとは此に亡く、
誰だ與れ獨り處る、

葛生えて棘を蒙い、
藪は域に蔓ぶ、

予が美きひとは此に亡く、
誰だ與れ獨り息らう、

角枕粲たり、
錦衾爛たり、

角枕粲たり、
錦衾爛たり、

角枕粲たり、
錦衾爛たり、

角枕粲たり、
錦衾爛たり、

角枕粲たり、
錦衾爛たり、

角枕粲たり、
錦衾爛たり、

予美亡此、
誰與獨旦、
予が美きひとは此に亡く、
誰だ與れ獨り旦けん、

○夏之日、
冬之夜、
夏の日を、
冬の夜を、

○冬之夜、
夏之日、
冬の夜を、
夏の日を、

○冬之夜、
夏之日、
冬の夜を、
夏の日を、

○冬之夜、
夏之日、
冬の夜を、
夏の日を、

○冬之夜、
夏之日、
冬の夜を、
夏の日を、

と五章二十句の詩であり、これについて白川静、境武男は共に「悼亡の歌」として妻が夫の死を墓前で悲哀して歌った詩と考え、一方赤塚忠は「若草の」という枕詞と八千矛神の妻覚ぎの歌問答

において、「野に蔓り生えている葛や藪を嫁を待つ妙齡の女たちに暗に喩えている」と、寢室において結婚を願っている女性が歌った詩と考えている。葛生篇の詩意が「悼亡」か「空閨」かは置いても、両者が「葛」を男性（死んだ夫か未来の夫）を慕うものつまり「思慕」を表す呪物として用いられている点と違わない。以上『詩経』中にもちいられる「葛」を呪物とする興詩は、異性・血族・祖霊に対する思慕の情ないし祝頌を表しているものであることは了解できたと思われる。したがって、鹿丘篇の原義的解釈もこの「葛」を呪物とする興詩の担う意味内で解釈されなければならない。

また、鹿丘編は『詩経』の国風に収録されているが、「風」に關しては赤塚忠が「中国古代歌謡の發生と展開」において、

殷代には、降神・招神することを一般に凡（柄、旁招の旁も同じ語源）

といい、特にその儀礼を考凡と書いていた。「風」はこの音を写したものに過ぎない。凡が降神・招神を意味することは、戦国時代以後は殆ど忘れ去られたが、同音の般に、般遊・般樂などとその引伸義が残っている。般遊は、神を迎えその神が神遊びすることから、般樂は神を招いて歌舞して楽しむ事からきているとしなければならぬ。

と言うごとく、本来基本的には降神・招神歌と考えるべきものであることは疑いの余地はない。

上述したことをもとに、邶風旄丘篇の原義を考えてみる。旄丘篇は、

○旄丘之葛兮、何誕之節兮、叔兮伯兮、何多日也、

○何其處也、必有與也、何其久也、必有以也、

○狐裘蒙戎、匪車不東、叔兮伯兮、靡所與同、

○瑣兮尾兮、流離之子、叔兮伯兮、衰如充耳、

と四章十六句からなる詩である。まず詩中の各語に語釈する。

「旄丘」は、王応麟が言うごとく地名であろう。「葛」は、くず、かずらのこと。「誕」は、周南葛覃篇の「覃」と同じで、その『毛傳』が言うごとく「延びること」。「叔兮伯兮」は、邶風邪旄兮篇にも見え、女性が思慕する男性に呼び掛ける時の常套句。「與」は、「以」の仮借字で「因(原因)」の意。「以」は、「故」の意で理由のこと。「狐裘」は、狐の皮で作ったかわごころも、秦風終南篇「君子至止、錦衣狐裘、」を参照。「蒙戎」は、『毛傳』が言うごとく「乱れるさま」。大雅板篇の「蒙戎」と同じ。「車」は、小雅南有嘉魚之什采芑篇に「其車三千、師干之試、」とあるごとく、一般には戦車のことであるが、ここは旅車のこと。「匪」は、彼の仮借字。「靡所與」は、「靡所以」と同じ。「瑣兮尾兮」は、聞

一多の言うごとく鳥の「ササ」という鳴き声。「流離」は、『毛傳』は鳥の名とするが具体的には良くわからない。しかしこの「流離」は文字通り家郷を遠く離れ、流浪する意と解しても十分通ずる。即ち流浪しているわが思う人と言う意味が掛けてあるのかもしれない。「衰如」「充耳」を『毛傳』と同様に「盛服」の意であるが、「充耳」は特に耳飾りのりっぱなことを言う。小雅魚藻之什都人士篇を参照。したがって、邶風旄丘篇の原義は、

○旄丘の葛は、ずいぶん節が延びたものだ。叔よ伯よ、なんと月日のたつてしまったことか。

○どうしてこんなに長い間ぐずぐずしているのか。きつと原因が有るのだろう。なんで久しい間来ないのか。きつと理由があるのだろう。

○狐のかわごころもは乱れ破れ、かの旅車は東に帰って来ない。叔よ伯よ、どうして一緒にいてくれぬのか。(早く帰ってきて下さい)

○ササと鳴く、流離の子よ、叔よ伯よ、りっぱな耳飾り。(かくも立派な我が殿子)

となる。そして、「葛」を呪物とする興詩は、異性・血族・祖霊に對する「思慕」の情ないし「祝頌」を表しているものであること、国風の詩は基本的には降神・招神歌であること、車が旅車であることを考慮すれば、旄丘篇の詩意は、遠行している一族の若者(かつ作者の思慕する人)の無事の帰還を祖霊に祈る詩と言うことになる。

三 『毛傳』による旄丘篇解釈

一方、旄丘篇に對する『毛傳』の全文は次のごとくである。

興也、前高後下曰旄丘、諸侯以國相連屬、憂患相及、如葛之蔓延、相連及也、誕延也、日月已逝、而不我憂、言興仁義也、必以有功德、大夫狐蒼裘、蒙戎以言亂也、不東言不來東也、無救患恤同也、瑣尾少好之貌、流離鳥名也、少好長醜、始而愉樂、終以微弱、喪盛服也、充耳盛服也、大夫褻然有尊盛之服、而不能稱德也、

これによると、「旄丘」とは、前が高く後ろが低い丘のこと。「葛」とは、くず、かずらのことであるが、『毛傳』はこの「葛」を含む興詩をくず・かずらが続き連なつて生えているように、諸侯の國に憂患が相連らなつて波及していることを述べるとしている。

『詩經』中の詩の類型化およびそれに基づく比較研究によれば前述したごとく異性・血族・祖靈に対する思慕の情ないし祝頌を表しているものである葛の興詩を『毛傳』はこのように解釈しているのである。「誕」は、原義と同じく「延びること」。「興」は、仁義にくみする意。「以」は、功德（功績と德行）を以て、答えてくれる意。ともに政治的な行為を相手に期待する意味に理解している。「狐裘」は、大夫の着る狐の皮で作った青いかわごらも。「蒙戎」は、原義と同じく乱れるさま。「匪」は、非の仮借字。

「靡所與同」は、患難を救い同朋を憐れむことがない意。「必有與也」や「必有以也」と同様に政治的な行為がないことを非難する意味に理解している。「瑣兮尾兮」は、若い時は美しいが長ずれば醜くなることを言うと言つて、「流離」は、鳥の名と解する。そして、「瑣兮尾兮、流離之子、」は、表面上は流離が若い時は美しいが、長じて醜くなることを言い、実際は大夫が始めは喜び楽しんでいたが、遂には鳴かず飛ばずになつたことを言うとする。

「褻如」「充耳」を『毛傳』はともに「盛服」というが、「充耳」は特に耳飾りのりっぱなことを言うとする。そして、「褻如充耳」を大夫が見掛けは立派であつても、徳があると称することはでき

ない、と大夫を誘ふ句と解釈している。以上の『毛傳』の解釈にしたがつて邶風旄丘篇を解釈すると、

○前が高く後ろが低くなつていゝ丘に葛が生えているが、その莖の節は延びている。そのように、諸侯の國に憂患が相連らなつて波及している。にもかかわらず、叔よ伯よ、なんと長いこと私の國の憂患を取り除いてくれないのか。

○どうしてこんなに長い間ぐずぐずしているのか。きっと我が仁義に賛成してくれるであろう。なんで久しい間来ないのか。きっと功德（功績と德行）を以て我々に答えてくれることがあるのだから。

○大夫の着ている上等の狐裘は乱れ破れ、かの旅車は我々の祖国の方角東にはでかけようとしない。叔よ伯よ、どうしてわが患難を救いあなたの同朋を憐れんでくれないのか。

○若い時は美しいが、長じて醜くなる流離の子のように、あなたがた大夫は始めは喜び楽しんでいたが、遂には鳴かず飛ばずになつてしまつた。叔よ伯よ、いくら見掛けが立派で耳飾りがりっぱでも、そんなことでは徳があると称することはできないぞ。

となる。

この『毛傳』の旄丘篇解釈は、原義的解釈が「遠行している一族の若者（かつ作者の思慕する人）の無事の帰還を祖靈に祈る詩」である旄丘篇を、仁義・功德がある作者の祖国を救出しようとしてない大夫の國を非難する詩と理解し、極めて政治的な内容の詩であると解釈している。

以上概括したように、『詩』本文それ自体の研究に基づく原義的解釈によれば、本来遠行している一族の若者（かつ作者の思慕する人）の無事の帰還を祖靈に祈る詩である旄丘篇を、『毛傳』は、

